城南の勤番の中の腕に覺えのある者で、一應小林と手を合せない者は無い筈であります。それであるのに見當がつかない。思ひ惑うてゐる其處へ

「先生」

と云つて現はれたのは先刻辻斬の立會に連れて行つた岡村といふ高弟でありました。

「おお岡村氏」

「先刻は失禮を致しました」

「いや先刻は大儀でござつた」

「先生、それにしても腹が立ちまするな」

岡村は何か餘憤があるらしく

「先生、拙者の考へには此の辻斬は慥に城内の勤番の武士のうちにあると斯う見當をつけましたが如何でござりまする」

「それそれ、拙者もさう思つてゐるが、その勤番のうちで、それでは誰と目星をつけやうが無い、それで考へが行き詰つてしまつてゐる」

「左樣、城内の侍ならば先生と我々との間に大抵の品定めが定まるのでござりまする、それで拙者も色々と考へて見ましたが、たうとう一つ考へ當りました」

「それは誰ぢや」

「先生、意外な人でござりまするよ、それこそは」

「遠慮なく云つて見給へ」

「そんなら申して見ませう、併し先生、城内で我々が、まだ其の腕前を海とも山とも見當のつけられないものが唯つた一人ある筈でございます、先生も一つ、それをお考へ下さいまし」

「左樣な人は……今もつくづくとそれを考へて考へ抜いたけれど左樣な人は一人もないのぢや」

「それが有るから不思議でございます」

「誰ぢや、云つて見給へ」

「それは先生、あの今度御新任になつた御支配の駒井能登守殿でございます」

「ナニ、駒井能登守殿」

小林もさすがに其の突飛な推察に驚かされたやうです。併し、さう云はれて見ると、城内で然るべき人として海の者とも山の者とも知れないのは新任の駒井能登守一人だけです。これを突飛として見れば突飛だが、注意を以て觀察すれば其の人が一廉の注意人物でない限りはありません。

「併し先生、これには寸分も證據とてはござりませぬ、先生なればこそ、斯樣な事を申上げるので餘人へは冗談にも申された事ではござりませぬ、それを確かめる爲に、私は今夜から一つ忍びを實地に稽古して見たうござりまするが如何でござりませう、先生の御意見は」

「成程」

「今夜といふ事に限らず、これから一心にあの駒井能登守殿の擧動を一々探査して見たうござりまする、如何なものぢ」

「成程」

「さうして愈々是はといふ動きの取れぬ處を押へたら、相手が相手だけに妙ではございませんか」

「うむ、面白い」

ここに至つて小林師範役は膝を打ちました。岡村も喜んで

「では先生も御賛成下さいますな」

「如何にもやつて見給へ、併し相手が相手だけに用心も一層ぢや」

その後岡村は道場へは餘り姿を見せないやうになりました。その當座暫らくは辻斬の噂がありませんでした。岡村はまだ何とも報告を齎さなかつたけれど、斯うして岡村が警戒する爲に辻斬もそれを憚つて當分遠慮をしてゐるのではないかと小林師範役は心の中で岡村を頼もしがつて、その中、何か面白い報告を齎すだらうと樂しみにしてゐました。

處が、それから六日目の朝つぱら、小林師範役がまだ床を離れたばかりの時分に、あわただしく一人の門弟が

「先生、先生、先生、大變でござりまする、大變」

小林は其の慌しさに驚かされました。

「先生、先生、また辻斬がございました、また辻斬が……斬られたのは岡村氏でございます、岡村氏が松陰御門の跡で袈裟に斬られて死んで居ります」

「ナニ、岡村が……」

小林文吾も仰天しないわけには行きません。押取刀で其の場へ駈けつけて見ると、岡村は左の肩から右の肋を斜に斷れて二つになつて無殘の最期。

小林文吾は餘りの事に、暫らく口も利けない位でありました。

七

その晩、一間のうちで頻りに刀を拭うてゐるのは机龍之助であります。

龍之助は盲目になつてゐるけれども、其の一間には丸い朱塗の行燈が立てられて、燈火がぼんやりと光つてゐます。

その燈火の下で龍之助は秋の水の流れるやうな刀を拭うて居りました。

刀は幾本も幾本もあつて、白鞘のものや拵へのついたものが、龍之助の左の側に積み重ねるやうにしてあるのを、右へ取つて拭ひをかけて置き換へてゐるやうです。

ある時はまた其れを行燈の下で二三度振つて見ました。ある時はまた其の刃切を調べるやうにして

ゐました。

刀は、いづれも二尺以上のものばかりです。斯うして四本數へて五本目に拔いた刀は二尺三寸餘りあるやうに見えます。

「ははあ、これだな、これが手柄山正繁だ」

と呟いて龍之助は、それを自分の右の頰に當て、刄を鬢の毛に觸れるやうにしてゐました。

盲目であつた龍之助には、その刀の肌を見ることが出來ません。鋩も匂ひもそれを見て取ることの出來る筈がありません。けれども

「これは斬れさうだ」

と云ひました。刄を上にして膝へ載せてから砥石を取つて龍之助は靜かに其の刄の上を斜に摩りはじめました。龍之助はいま此の刀の寢刄を合せはじめたものであります。刀の寢刄を合はせるからには、きつと近いうちに其の刀の實用が豫期される。明日は人を斬るべき今宵といふ時に刀の寢刄が合せられる筈のものであります。

それですから刀の寢刄を合せる時には大概の勇士でも手が震ふものであります、心が戰くものでありました。それは怯れたわけではないけれども、明日の決心を思ふ時は血肉が靜止としては居られないのであります。それは左樣あるべき筈です。然るに此の人は平氣で寢刄を合せてゐます。蒼白い面の色、例の切れの長い眼の緣には十津川で受けた煙硝のあとが心持殘つてゐるけれども、伏目になつ

てゐる時には、それが盲目とは思はれないほどに昔の面影を傳へてゐました。その面の色は何時見ても沈んでゐる。

音無しの構に取つた時に見る眞珠を水の底に沈めたやうな眼こそ今は見ることが出來ませんけれど、その代りに蒼白い面の表一面に漲るやうな沈痛の色、それは白日の下で見るよりは燈火の蔭で見た時に、蒼涼として人の毛骨を寒からしむるものがあります。

今、漸く寢刄を合せ終つたのは二尺三寸、手柄山正繁の一刀でありました。この刀を斬れるやうにして其れから龍之助は何をするつもりであるか知れないけれど、今龍之助が座を占めて刀調べをしてゐる此の一間、抑も此の屋敷、それは說明して置くの必要がありませう。

この屋敷は甲府を離るること半里、躑躅ヶ崎の古城跡にある荒れた大きな屋敷であります。さうして此の屋敷の持主は神尾主膳であつて、主膳は前の持主が住み荒らしたのを買ひ取つて下屋敷のやうにしてゐました。けれども主膳自らは此處に來ることが甚だ稀であつて番人に任せて置いたから、いよいよ屋敷は荒れてゐました。それを此の頃になつて主とも客ともつかぬ者が一人出來ました。それが卽ち此の机龍之助であります。

神尾主膳が何故に机龍之助を此處へ置いたかといふことは、まだ疑問でありましたけれど、此處へ置かれた机龍之助は、囚人でも監禁の相でもありません。

龍之助を此處へ移したものが神尾主膳でありとすれば、今ここへ刀を宛がつて置く其の人も神尾主

膳でなければならぬ。

神尾主膳の名を騙つて奈良田の奥へ甲州金を取りに行つた僞物を殺して、その駕籠で神尾の邸へ乘込んだ筈の龍之助を、神尾主膳が保護するやうな形式を取つてゐることが不思議であるといへば不思議であります。

龍之助が此の古屋敷に來てから、もう可なりの時が經ちましたけれど、未だ一回も外へ出たのを見たものがありません。幾間も幾間もある屋敷の何れの間に住んでゐるのであるかさへもよくわかりませんでした。併し、夜になると、屋敷の番人をしてゐる男が食物を運ぶのと燈火をつけに來ることによつて、其處に人が居ることがわかりました。

また庭の幾處に卷藁が兩斷されて轉がつてゐることによつて、此の家に住む人が樣物をするのだといふことも想像が出來るのであります。

ここに置かれた机龍之助が刀調べをしてゐることも、その調べた刀によつて卷藁の類を試してゐることも、隙つぶしとしては左樣ありさうな事であります。寢刄を合せてゐることも、卷藁を切る爲めであつたかと思へば、別段に凄い事ではありません。

そこで寢刄を合せ了つた龍之助が手柄山正繁の一刀を取り直した時に、廣い座敷、凡そ二十疊も敷ける此の一間の片隅にあつた古びた長持の蓋がガタと云つて動きました。

その音で龍之助は刀を持つたまま長持の方を向きました。龍之助が長持の方を向いた時に長持の蓋がまた續け樣にガタガタと二つばかり動きました。三つ目には、もつと烈しい音で下から力を極めて何か持ち上げるやうな音で長持が動きました。

屹と其れを見つめてゐた龍之助は

「騷ぐな、騷いだとて時が來ねば許しはしない」

と長持の蓋に向つて斯う云ひました。その樣は何か心得てゐるらしく見えます。併し動き初めた長持は龍之助の此の聲を聞いて靜まる事が無くて却て烈しい音を續けざまに中から立てて、それに相答ふるやうな有樣でありましたが、敢て一言も人の言の葉としては其の中から洩れて來るのではありません。

「大人しうして居れ、騷ぐと却て爲にならぬ」

龍之助は叱るやうに、また敎へるやうに、或は嚇すやうに斯う云ひました。處が、その聲を聞くと、いや增しに長持が動きました。動くといふよりは寧ろ、長持その物が荒れ出したやうに見えました。若し此の長持の中に人があるならば、こんなに荒れ出す先に、許せとか助けよとか、哀れみを請ふべき筈であるのに、さうでなくて、ただただ必死に荒れてのみゐるのでありました。その荒れる烈しさを此處から想像すれば、それは可なり力のある男のする業であると誰もさう思はないわけには行きません。

口では叱るやうに、敎へるやうに又は嚇すやうに騷ぐなと云つたけれど、その態度は冷然たるもの

で、いよいよ動き荒れ出した長持の蓋も箱も中から裂けてしまひさうになつた時も、龍之助は立たうともしませんで、やはり冷然として、其の刀を鞘に納めてしまひました。その途端に長持の何れの部分かが、メリメリと裂けるやうな音がしたかと思ふと、中から悶掻き出したのは一人の男。

それは丁度、紺屋の藍瓶の中へ落ちた者が、あわてふためいて瓶から這ひ上るやうな形であります。面も着物も眞黑でありました。

古い長持であつたから、それで錠前も刎切れたものであらうけれど、それにしても中から其れを刎切るのは容易な力ではありません。渾身の力を絞つてやつと蓋を跳上げて、箱の外へ悶掻き出した一人の男は面も着物も、そつくりと紺屋の藍瓶へ漬けて置いたやうに眞黑くなつてゐました。其の悶掻き出す身ぶりによつて見れば、兩手を後へ廻して縛られた上に、兩足を亦一つに絡げて此の中へ投げ込まれてゐたものと見えます。

龍之助は今しも鞘へ納めた手柄山正繁の刀を膝元へ引きつけたままで、ただそちらの方を向いて坐つてゐるばかりでありました。この刀は白鞘の刀ではありません。それは神尾が差しても龍之助が差しても恥しからぬほどの拵へのある刀でありました。その刀を心持居合に取つて行燈の方向を少し避けるやうにしたのは、ここに引寄せて斬つて捨てようとの心構に見えました。

眞黑になつて手足を縛られた人間がやつと立ち上つた形は、大きな蠑螈が天上するやうな形であります。手足こそ縛られてゐるけれども一向猿轡を箝められた模樣もないのに口を利かないのは何故だらう、何とも云はないで、蠑螈の天上するやうな形をして漸と長持を悶掻き出した黑い人影は人魚の兒が這ひ出したやうにして疊の上をのたくつて龍之助の方へと寄つて來るのであります。

のたりのたつて其の男は遂に龍之助の膝の處まで來ると、其の膝を枕にするやうにして龍之助の面を打ち仰ぎました。

「叱」

龍之助は左の手で其れを拂ひ退けると、其の男は執念く再び龍之助の膝にのたり着くのであります。

「五月蠅い」

龍之助は再び其れを拂ひ退けました。拂ひ退けられて男は三たび龍之助の膝にのたりつきました。その口を慌しく動かして咽喉首が梭のやうに上下する處を見れば、これは何か云はんとして云へないのでした。訴へんとして訴へられないものでありました。

突き放され、突き放されて、またのたりつく有樣は他目には滑稽でもあるけれども、その當人は名狀し難い苦しみに悶掻いてゐるのです。如何せん机龍之助は、それを滑稽として見ようにも、また苦悶の極みとして見ようにも、どちらにしても見て取ることが出來ない人でありました。

併しながら、机龍之助の兩眼が暗くて其の人の何物であるやを見て取ることが出來ないにしても、たとへ些やかながら行燈の火がある以上は、面も着物も眞黑になつてゐるけれど、見知つたものには間違ひなく、それは馬大盡の雇人の幸内であるといふことがわかるのであります。

これは馬大盡の家の幸内でありました。伯耆の安綱の刀を持つて出て行方知れずになつた幸内が、今ここに此んな目にあはされてゐる事を誰が知らう。幸内は其れを今神か佛か知らないけれども、居合せた机龍之助に向つて訴へようとするものらしいが、どうしても口が利けないらしい。

「神尾殿が來て何とかするまで、元の處で窮命して居れよ」

龍之助は、やはり片手でさぐつて、のたり廻る幸内の襟髪を無造作に掴んで、部屋の隅へ突き飛ばしてしまひました。

幸内を振り飛ばした机龍之助は、やがて手柄山正繁の一刀を腰に差して立ち上りました。

振り飛ばされた幸内は、長持の隅の處へ投げ倒されたなりで、今度は動くことをしませんでした。

さうして置いて龍之助は懐中から宗十郎頭巾を出して冠りました。頭巾を冠つてしまつてから、座敷の隅をさぐると其處に杖が立てかけてありました。その杖を手に取つて、行燈の方へ靜かに歩み寄つて、其の火を消さうとすると、廊下に人の足音がしました。それで龍之助は行燈を覗いた様な形の儘で、その足音に耳を傾けました。

足音は廊下を傳つて此の座敷へ來るのであります。

「机氏、机氏」

と云つて龍之助を呼びました。

「おお、主膳殿か」

龍之助は其れを知つて燈火を吹き消すことをやめて、冠つてゐた頭巾を取つて懐中へ押隠すやうに入れてしまひました。そこへ入つて來たのは神尾主膳でありました。

主膳は片手に長い箱を抱へて

「龍之助殿、貴殿に見せたい品がある、それでワザワザやつて來た」

「それはそれは」

主膳は長い箱を目の前へ取り直して

「いつぞや噂をした伯耆の安綱の刀が手に入つた」

「ははあ、安綱がお手に入つたか、それは珍重」

主膳が包みを解いて箱の中から出した袋入の白鞘は、前日様物のあつた日から、幸内と共に行方不明になつた馬大盡の家に傳はる寶刀であります。

しばらくして神尾主膳は燈下で其の安綱の鞘を拂つて龍之助の前に突き出して

「二尺四寸、大潤れで鋩と匂ひの奥床しいこと到底言語には述べ盡されぬ」

と云ひました。

「篤と拜見したいものだが、見ることが出來ぬ」

と云つて龍之助は笑ひました。

「兎も角も手に取つて見給へ」

主膳は其の刀を持ち添へるやうにして龍之助に手渡ししました。

「成程」

龍之助は伯耆の安綱の刀を手に取つて持ち試みてゐましたが

「安綱といへば古刀中の古刀、誰も其の位を爭ふものはないのだが、さて實力は何程のものか知らん」

と云つて嘯くやうに見えました。

「龍之助殿、貴殿一つ試して見る氣はないか」

「この安綱を」

「左様」

安綱を試して見ろと云はれて龍之助は首を横に振りました。

「如何に名刀なりとて、千年も經つては隱居同様、ただ名物として奉つて置くが無事であらう」

「たとへ千年經たうが二千年經たうが、精が脫けるやうでは名刀の値打は無い、この肌を見給へ、この地鐵を見給へ、昨日湯加減をしたやうな若やかさ」

「拙者には名刀と云はず、無名刀と云はず、手に合うたものが宜しい」

「それは左様かも知れぬ、併し、安綱ほどの刀を試して千年からの極めを破るも面白いではないか。この刀を持つて物を斬つた話、古くは源頼光の童子切りと、近代では長曾我部元親が何とやらしたといふ話、その外は長れ跪んで神棚へ祀る外には何等の能事がない、事實切れ味は如何なものか拙者も知らぬ、世間の奴も知らぬ」

神尾主膳は机龍之助をして伯耆の安綱と稱せらるる此の名刀を試させん底意があつて來たものと見えます。

「それは左様であらう、伯耆の安綱とも云はれる刀で、犬猫も斬れまいし、滅多に土壇や卷藁をやつても物笑ひ、それこそ寶として飾つて置くが無事だわい」

龍之助は寧ろ安綱を冷笑するやうな言葉つきでありました。

「折れても承知、その刀の眞の切れ味が知りたい」

と神尾は云ひました。

「折れて承知ならば、一番斬つて見ようか」

龍之助は斯う云ひました。

「頼む」

神尾は透さず斯う云ひました。

龍之助は打ち返して、その刀を振り試みてゐました。

「よし、試して見よう」

龍之助は、やはり卷藁か土壇を切るやうに容易く請合つてしまひました。

「それでは、机氏」
と云つて、主膳は伯耆の安綱を龍之助に預けて歸らうとします。
「もう、お歸りか」
「この頃は甲府の市中が物騒でな、我々とても油斷しては歩けぬ」
「物騒とは」
「辻斬が流行るのぢや」
「辻斬が」
龍之助は此の時苦笑ひをしました。主膳は刀を差しながら
「昨夜も、小林と申す劍道の師範役の高弟が斬られたのぢや、斬つた奴は何者だともまだわからぬ、奉行の手でもわからぬし、城内の者にも心當りがない、併し斬手は非常な腕だ、それで甲府の上下、身の毛を慄立ててゐるが困つたものぢや」
「うむ」
「若し、貴殿の眼でも見えたなら、斯ういふ時には、其の曲者の眼に物見せてやらう者を、あたら英雄も目無島では悲しい事ぢやなう」
「目が見えたら辻斬をして歩く方へ廻るかも知れぬ」
「ははは、左樣ありさうな事ぢや」

神尾主膳は何氣なく笑ひましたが、この時はじめて氣のついたやうに
「龍之助殿、あの長持の中の物、あれを貴殿にお任せ申さう、安綱の切味、事によつたら、あれで試めして御覽あれ」
「宜しい」
主膳は別に長持へ近く寄つて其れを改めて見ようともしませんでした。龍之助も亦長持から怪しい者が出て來て自分の膝へ縋りついたといふ事を語るでもありませんでした。その長持から出た怪しい者も此の時は早やジタバタするではありません。
斯うして神尾主膳は此の古屋敷を出て行きました。甲府から半里、駕籠にも乘物にも乘らずに來て、玄關には草履取と提灯持兼帶の男が一人待つてゐるばかりでした。
躑躅ヶ崎の古城は武田家の居城のあつた處、三面には岡があるけれど、城は平城、門の跡や、廓のあと、富士見御殿のあつた臺の下には大きな石がある。其のあたりは松の木や荆が生茂つてゐる。神尾主膳が本通りを甲府へ歸りついた時分に大泉寺の鐘が九ツを打ちました。その時分に此の古城の處を机龍之助が歩いてゐました。やはり宗十郎頭巾を冠つて杖を持つて刀を差してゐる。その行先は何れであるか知らないけれども、向つて行く處はやはり甲府の方面であります。

八

その晩、甲府八幡宮の茶所で大欠伸をしてゐるのは宇治山田の米友であります。

土間には炭火がカンカンと熾つてゐる。接待の大茶釜が湯氣を吹いて盛んに沸いてゐる。そこで米友は此方の疊の上に胡坐を搔いて遠慮なく大欠伸をしてゐます。

下には淺黄色の短い着物を着て上へ白丁を引つかけて大欠伸をした米友は、またきよとんとして大茶釜の光るのと、それから立ちのぼる湯氣と、カンカン熾つてゐる炭火をながめてゐましたが

「どつこいしよ、燈籠のあかりを見て來なくちやならねえ」

と云つて其處を立ちました。立つ時に米友は億劫さうに烏帽子を冠つて其の紐を横つちよの方で結んで、銅の油差を片手に、低い床几を片手に持つて、草履を突つかけて外へ出ましたのです。

「何だか知らねえが、今夜は此の八幡樣へでえだらぼつちが來るさうだから、それで燈火を消しちやあならねえのだ、でえだらぼつちといふのは、どんな奴だか、これも俺らは知らねえが、恐ろしくでかい奴だといふ話だ、そのでえだらぼつちが、この八幡へ喧嘩をしかけに來るから、それで八幡樣の前を明るくして置けといふ神主樣の仰せだ、だから俺らは其の仰せ通り今夜は不寢の番で、お燈明へ油を差して歩くんだ」

油差と床几を手に持つて外へ出た米友が、此んな事を云ひました。さうして社の鳥居の處から初めて幾つもある木の燈籠や、石の燈籠を一々見て歩いて、消えさうな奴へは油を差して歩きました。歩くと云つても、やはり米友は跛足です。それに脊が低いから一々床几を下へ置いて其の上へ載つて、それから油を差して歩きます。

境内を殘る隈なく見廻つて、油を差すべきものには差し終つてから、米友はまた茶所へ歸つて來ました。さうして熱いお茶を一杯入れて呑んでから、烏帽子を取つて叩きつけるやうに拋り出して、また前の處へ胡坐を搔いて、前のやうに、ぼんやりとして、接待の茶釜の光るのと炭火のカンカンしてゐるのをながめてゐましたが、程經てまた大欠伸をはじめてしまひました。

「眠つてえな」

と云つて眼を擦りながら

「ははは、笑あせやがら」

何と思つたか米友はカラカラと笑ひ出して

「でえだらぼつちなんといふ者は見た事も聞いた事も無えんだ、でえだらぼつちが來たからつたつても、何も其んなに驚くことは有るめえぢやねえか」

と云ひました。何か米友は其のでえだらぼつちに就いて腑に落ちないことがあるやうです。

「そのでえだらぼつちが喧嘩に來るから其れを怖がつてゐるやうな八幡樣ぢやあ、八幡樣の有難味

が薄いや、でえだらぼつちが來たら來たやうに、俺らが何とか一つ掛合つて見てやらうぢやねえか」
米友は頻りにでえだらぼつちの事を云つて當のない臂を張つて見ましたが、それも暫らくすると、眠氣に負けたらしく、羽目へ寄りかかつてコクリコクリと漕ぎ出してしまひました。
「あ、眠つちや可けねえんだ」
茶釜を溢れた沸湯が炭火の上に落ちてチューと云つた音で米友は眼を醒ましましたが、直ぐにまた漕ぎはじめてしまひました。
やや暫らく居眠りをしてゐた米友が
「あ、また眠つちまつた」
と云つて二度目に眼をさました時は、何か氣にかかるものがあるやうな容子です。
「はてな、今、足音がした、慥に此處で足音がしたに違えねえんだ」
と云つて、米友は眠い目を睜つて鳥居の方から外を見ました。
「誰だい、誰か來たのかい」
と咎め立てをしたけれど、外は闇でよくわかりません。燈籠の灯影の屆く處には何者も見えませんでしたけれど、感心な事に宇治山田の米友は、居眠りをしても、その足音を聞き洩らすやうな油斷がありません。
「眞道、でえだらぼつちぢや有るめえな」

と云つて座右を顧みた時に、其處に六尺の手槍がありました。
「兄い、中々寒いぢやねえか」
氣輕に茶所へ入つて來たのは、でえだらぼつちでも無ければ、八幡樣の廻し者でもないやうです。竹の笠を被つて紺看板を着て、中身一尺七八寸位の脇差を一本差して貧乏德利を一つ提げた仲間體の男でありました。
「うむ、寒い」
米友は案外な面をして仲間體の男を見ますと、その仲間體の男は、心安立てにヅカヅカと火の傍へ寄つて來て
「兄い、濟まねえがお茶を一杯振舞つて呉んねえ」
といひました。
「幾らでも飲みねえ」
仲間體の男は貧乏德利を土間へ置いて大土瓶から熱いお茶を注いで飲みました。お茶を飲む處を笠の下から見ると、此の仲間體の男は折助にしては惜しいほどの人柄に見えました。
「何處へ行つたんだい、もう晩いよ」
と米友は咎め立てをするやうな口ぶりであります。
「ナニ、部屋からの歸りなんだ」

と仲間體の男は何氣なき體で返事をして、お茶を飲んでしまふと懐中から叺を取り出して、炭火で火をつけて鉈豆でスパスパとやり出しました。

「兄い、不寢番かい、御苦勞だな」

と云ひました。

「ははは、不寢の番だよ、今夜はでえだらぼつちが來ると云ふから其れで寢られねえんだよ」

「ははあ、成程」

と云つて仲間體の男は頷きました。

「でえだらぼつちが此の八幡樣へ喧嘩をしかけに來るんださうだ、それで八幡樣のお庭を明るくして置けと神主樣の言ひ付けだ、だから斯うして不寢の番をして、時々燈籠へ油を差して歩くんだ」

米友はワザワザ申譯のやうに云つてゐると

「成程、それは御苦勞樣だ、油を差すのはいいが油を賣つちや可けねえよ」

「馬鹿にしてやがら、油なんぞを賣るものか」

「それでも、今コタリコクリとやつてゐたぢやあ無えか、あんな時にでえだらぼつちがやつて來たら如何する」

「そりやあ、コクリコクリやつてゐたつて了簡は眠つちやあ居ねえんだ、眼は眠つても心は眠らねえから、誰が何處へ來たといふ事もちやあんと判る」

「豪い」

と云つて、米友を煽てた仲間體の男は、いい氣になつて、米友が今持つて歩いた床几の上へ腰を卸してしまひ

「兄い、眠けざましに一口濕して見ちや如何だ、いい酒だぜ」

と云つて傍へ置いた貧乏徳利を取り上げて少しく振つて試み、それから懐中へ手を入れて經木皮包みを一箇取り出しましたが、こんな事をしてゐる間にも如何やら外の通りを氣にかけてゐる容子であります。この男は仲間體に見えたけれども仲間でないことはその人柄の示す通りであつたが、事實もやはり其の通り、これは師範役の小林文吾の變裝でありました。

小林文吾は言葉も身ぶりも、やつぱり仲間そつくりで、徳利を振つて見て、懐中から經木皮包みを取り出しました。

「兄い、旨めえ肴があるから一口濕して見ては如何だい」

「俺等は酒は飲めねえんだ」

と米友は斷りました。

「其んな事を言はねえで、一杯附き合つたら如何だい」

「酒は飲めねえんだ」

「さうかい、そりやあ折角だな」

と小林文吾が多少氣の毒さうに德利を引込めたから、米友も其れに好意を表する氣になりました。

「俺らは飲めねえけれど、お前、其處で飲むなら飲みねえ、ナニ構はねえよ、神樣の前だつてお前、神樣だつてお神酒を上るんだからな」

「さうかい、其れぢや濟まねえが、此處で一杯やらして貰ふとしよう」

小林文吾は米友の好意を得て、また德利を引出しました。その德利から、さきに借りた茶碗へ冷で一杯注いで、それを一口飲んでから茶碗を疊の上へ置いて、德利を炭火の端へ突込んで地燗をするやうに仕掛けながら

「俺が一人で飲んで、お前に見せて置いては濟まねえ、酒がいけなければ肴を御馳走しようぢやねえか、この通り結構な肴を持つて來てゐるんだぜ、目刺だよ、目刺を大相場で買ひ込んで來たんだ、目刺だからと云つて馬鹿にしちや可けねえ、今時、甲州で此んな旨めえ目刺が食へるわけのものぢや無え、外の國ならば如何な魚でも食へるんだけれど、この甲州といふ山國へ來ては、たとへ、目刺にして見た處が容易なもんぢやねえんだ、昔、信玄公が北條と軍をした時分によ、小田原の方から鹽を送らなかつたものだ、これには信玄公も困つたね、海の無え國で、鹽の手をパツタリ留められてしまつたんぢやあやり切れねえ、それを越後の謙信といふ大將が聞いてよ、おれが信玄と軍をするのは弓矢の爭ひで鹽の喧嘩ぢやあ無え、土や城は一寸もやれねえが、北國の鹽で宜ければ幾らでもやると云つて度胸を見せたのは名高え話だ、だからお前、今目刺を持つて來るにした處で、駿河の國から呼ぶんだぜ、これから駿河の海邊へ出るのには三十里から有るんだ、その間を生肴が通ふ時は半日一晩で甲府へ着くから大したものぢやねえか、その半日一晩で着いた生肴の方は中々俺達の口にやあ入らねえ」

といつて小林文吾は經木皮包みを開いて火箸を横にして其れを炙らうとすると、見てゐた米友が

「おつと待つて呉れ、酒はいいけれど肴の方はよして貰ひてえ、酒は神樣も召し上がるけれど、まだ八幡樣が目刺を召し上がつたといふ話は聞かねえからな」

「成程」

小林は米友の理窟に伏して强ひて目刺を燒かうともしません。

「この頃は世間が騷がしいからな」

ややあつて小林は何ともつかずに此んな事を云ひました。

「ははは、世間が騷がしいといふのは、あの辻斬のこつたらう」

「うむ」

米友が存外平氣なのを見て、小林は眼を丸くしました。

「十日ばかり前の晩に此の松山の向ふで一人殺られたんだ。そいつが殺られた時は俺らは、まだ此の八幡樣へ奉公に來てゐなかつたんだ、この辻斬といふ奴は甲府に限つた事は無えんだ、江戸へ行つて見ねえ、この頃は彼方此方で隨分流行つてゐらあ」

「そんなものに流行られては堪まらねえ」
と小林は額を押へました。
「甲府へはまだ流行つて來ねえけれども江戸では天誅といふ奴が流行り出してるのだ、天誅といふのは、金持や何かで太えことをした奴を踏んごんで行つて斬つちまつて、其の首を曝したりなんかするんだ、中には前以て高札を立てて脅しといて斬る奴なんぞもあるんだ、何でも薩摩の奴が可けねえんださうだ、薩摩つぽうが天誅をやりやがるんだ、ナーニ名前は天誅で其の實は泥棒をする奴があるんだ、だから天誅ぢや無え、泥誅なんだ、俺らが本所に留守番を頼まれてゐた時分に、其の泥誅を脅かしてやつたのは宜い心持だつた」
米友の氣焔は少しく小林の注意を呼び起したらしく
「俺も久しい事江戸へ行つて見ねえが、江戸の市中も其んなに物騒なのかい」
「左樣さ」
米友は此處で江戸通になることに相應の誇りを感じたものらしく
「江戸へ行つて見ねえ、つまり徳川の政が末なんだね」
「成程」
「何しろ公方樣のお膝元で天誅や辻斬がやたらにあつて、其れをお前、役人が滅多に手出しが出來ねえんだからな、それでまた片一方には貧窮組といふのがあるんだ」

「成程」
「貧窮組といふのは、貧乏人の寄り集まりなんだ、貧乏でキュウキュウ云つてるから其れで貧窮組と云ふんだなんて、貧乏を見えにして黨を組んで旗を立てて車を曳いて押し歩いてる」
「成程」
「それに比べりやあ、甲府なんぞは無事なものさ、一人や二人の辻斬は、どうも仕方が無からうぜ」
「處が一人や二人ぢや無えんだ……」
小林は其れに附け加へて何か云はうとした時に、十日ほど前の晩に人が斬られたといふ松林の方で自慢の聲が長く引いて聞えて來ました。
「來たな、鍋燒が來たぞ」
米友は如何やら其の鍋燒うどんを待ち構へてゐるらしくあります。
「鍋やーき……」
二度目に聞えた時に、鍋やーきだけで止まつてしまひました。うどーんといふ聲を續ける處で急に咽喉が塞つてしまつたらしいから、折角の餘韻が壓殺されたやうな具合であります。それと同時にガチヤン、ピシン、ドタンといふ大騒ぎ、丼が飛ぶ、小鉢が躍る、箸が降る、汁とダシの洪水、屋臺諸共に此の茶所へ轉げ込んで

「ウー」

と唸つたのは鍋焼饂飩屋の老爺であります。

「如何した」

小林文吾は、今轉げ込んだ鍋焼饂飩を引き起して忙はしく尋ねました。

「そ、そ、そこで斬られた――」

鍋焼饂飩は、虎慄しながら、やつとそれだけ云ひました。斬られたとは云ふけれど、斬られてゐる容子はない、單に脅かされたものか或は他の斬られたのを見て、自分が斬られたと思つたのか。小林は脇差の鯉口を切りながら、外の闇へ飛んで出でました。

「爺さん、確かりしなくちや可けねえ」

其のあとで米友が鍋焼饂飩の介抱に廻りました。

鍋焼饂飩は、やつと回復したけれども、まだ生きた空は有りません。

「一體、こりや如何したんだい」

と云つて尋ねて見ましたけれど、その返事が一向纒まりがありません。ただ鍋焼饂飩を、お客に喰はせてゐると、松の蔭から黑い人影が現はれて、そのお客も引つくり返つたが自分も無暗に此處へ逃げ込んだといふだけの要領でありました。そのお客がどんな人であつたか、また其の物蔭から出た黑い人影が、どんな形であつたか、そんな事は丸つきり要領を得ないから、米友は笑止がつて鍋焼饂飩に力をつけてやり、お茶を飲ませたり、壊れた道具を片附けたりしてやりました。鍋焼饂飩は、まだ齒の根も合はないで、慄へながら始末をしてゐる處へ

「ああ、危ねえ、危ねえ」

と云ひながら、またも其處へ入つて來たのは風合羽を着た旅の男。

「兄さん、すんでの事に命拾ひをして來たよ」

笠を取つた其の人は七兵衛でありました。

「やあ、お前様はさいぜんのお客様」

と鍋焼饂飩が叫びました。

「爺さん、飛んだ迷惑をかけちまつた、それでもまあ、お互に命拾ひをして宜かつたね」

と云つて七兵衛は鍋焼うどんを慰めました。

「でもまあ、命拾ひをしたにはしましたがねえ」

と鍋焼饂飩は諦めたやうな諦められないやうな返事をして、恨めしさうに壊れた商賣道具を見てゐます。

「商賣道具がこはれたね、爺さん、俺が立て替るよ」

七兵衛は可なり重味のある財布を首から外して鍋焼うどんの屋臺の上へ投げ出しました。

「こんなに戴いちやあ、こんなに戴いちやあ濟みませんねえ」

と云つて鍋燒饂飩は恐縮してしまひました。それには拘らず七兵衞は上り端へ腰を掛けて

「やれやれ、斯うして俺達は命辛々逃げて來たのに、また物好な人もあればあるもので、わざわざ斬られに後を追蒐けて行つた人があるやうだが、友さん、如何だい一つ其の槍を擔いで容子を見に出かけて呉れねえか」

七兵衞は米友を顧みて水を向けましたけれど、米友は苦笑ひしてそれに應ずる氣色がありません。

九

その晩はそれで濟みました。その近所に別段斬られた人もありませんし、鍋燒饂飩も夜明になつて無事に歸つたし、七兵衞も亦明るくなる時分には何處へ行つたか姿が見えなくなりました。

米友は昨夜の睡眠不足があるから夜が明けると共に、擔ぎ出されても知らない位に寢込んでしまつたから、日がカンカン寢てゐる處の障子に當るのも御存知がありません。

米友が斯うしてグツスリと寢込んでしまつてゐる朝、この八幡宮へ珍らしい二人の參詣者がありました。二人共、同じ年頃の女であります。さうして二人共に藤の花の模樣の對の振袖を着て居りました。それから頭と面とはこれも對の紫縮緬の女頭巾を、スツポリと被つてゐます。

「お孃樣」

と一人の娘が云ひました。

「あい」

一人の娘が領きました。一人は慇懃であつて、一人は鷹揚であります。見た處では頭の先から足のうらまで對の打扮でありましたけれども、これは姉妹でも友達でも無く、主從の關係にあるらしいことは、今のその挨拶の仕樣でよくわかります。

「ここが八幡樣でございますね」

「ああ、ここが八幡樣」

斯う云つて二人は石段を登ります。この時はまだ外に參詣の人もありませんし、この近所を通る人も極めて稀です。石段といつても五六段位しかありません。苦もなく二人は登つて二人は鳥居の中へ入つて行きました。

お宮の前へ來てから、はじめて其のうちの一人が頭巾を外しました。さうして現はした面を見ると眼のさめるほどに美しくありました。それは間の山のお君であります。お君は、こんな結構な晴着で頭髪も見事に結つてゐました。

お宮の前へ來てお君だけが頭巾を取りましたけれど、もう一人の娘は決して頭巾を取らないのであります。頭巾を取らないで八幡樣のお宮の正面を避けるやうにして水屋の方へ漫ろ歩きをしてゐるのに、お君はそれと違つてお宮の前へ出て恭しく拜禮しました。それからお賽錢を紙に包んで、お賽

鍵箱の中へ投げ込みました。
「君ちやん」
頭巾を取らない方の娘が呼びますと
「はい」
お君はやはり恭しく返事をして、頭巾を取らない娘の方へ寄つて來ました。
「わたしは此處に待つてゐるから、お前だけ彼方へ行つてお御籤を戴いて來てお呉れ」
頭巾を取らない娘が云ひ出しますと
「承知致しました、ではお嬢様、暫らくこれにお待ち下さいませ」
「あの、お君や、若し年を聞いたら十九で、午年の男と云ふやうに」
「はい」
「家を出てから今日で七日目になるといふ事や、大切な寶を持つて出たといふ事も聞かれたら答へても宜いけれど、餘り細かくは云はないやうに」
「はい、宜しうございます」
「それから、わたしの家の名前だの、幸内の名前だの、わたしの名前など、尋ねられても決して云はぬやうに」
「畏まりました」

お君は頭巾を取らない娘と、これだけの問答をして、一人だけ履物を脱ぎ揃へてお宮の上へあがりました。
程なく、お君は一枚の紙を手に持つてお宮の中から出て來ました。
「お嬢様、お御籤を戴いて參りました」
水屋の處に立つて待つてゐた頭巾を取らない方の娘――一々頭巾を取らない方の娘とことわらなくても、それはお銀様と云つてしまつた方がよいのです。
お君の手に持つてゐたお御籤の紙がお銀様の手に渡されると、お銀様は受取つて讀みました。お銀様は紫の女頭巾をほとんど眼ばかりしか出さないやうに深々と被つてゐました。その眼を凝とお銀様がお御籤の紙上に注いで默讀してゐるのを、お君は傍から覗いてゐました。お君には其の文字は讀むことが出來ないのであります。
「お嬢様、お御籤の表は、吉でございますか、凶でございますか」
「この通り八十五番の大吉と出てゐますわいな」
「大吉、それは結構でございます、この八幡様のお御籤が大吉と出ますやうならば、もう占めたものでございますね」
「まあ、お聞き、大吉は凶に歸るといふ事もあるから、一通り讀んで見なくては」
お銀様は小さい聲で讀みました。

望用何愁レ晩
求レ名漸得レ寧
雲梯終有レ望
歸路入二蓬瀛一

「君ちやん」

お銀様はお君を呼ぶのに君ちやんと云つたりお君と云つたり亦お君さんと云つたり色々であります。

「はい」

「この文句が解つて」

「いいえ」

「これだけでは、わたしにも宜くわからないから、この下に假名で書いてあるのを讀んで見ませう、望用何愁レ晩といふ文章の下には〈のぞみ事のかなふ事のおそきをうれへず、こころながくじせつをまつべしとなり〉と書いて有ります」

「はい」

「それから求レ名漸得レ寧といふ文章の下には〈やうやくとはしだいしだいにといふ事也、ほまれのなをもとめ、しだいしだいに名がたかうなり、心安くおもふやうになるべしとなり〉と書いてあります」

「まあ、しだいしだいに……」

お君は何だか充分に呑込めないやうな面をしました。

「その次に、雲梯終有レ望とは、大きなのぞみ事もすでに其のたよりを得たといふ事さうな、歸路入二蓬瀛一といふことは望みが叶つて歸りには蓬瀛と云つて仙人の住む目出たい國へ行く事さうな」

「何しても結構なお御籤のやうでございます」

「けれどもお君や、心ながくとあつたり、しだいしだいとあつて見れば、これは急の事ではないらしい」

「左樣でございますか」

「わたしは急であつて欲しい、一日も一刻も早くその望みが叶へて欲しい」

「わたくしも其の樣に思ひまする」

「氣長く待つてゐられる事と、居ても立つても待つては居られないことがあるのを神樣は御存知ないかしら」

「そんな事はございません」

「でも、この事の晩きを愁へずの、心長く時節を待ての、しだいしだいに望みが叶ふのと其んな事が今のわたしに堪へられようか、わたしは此のお御籤が怨めしい」

お銀樣は如何したのか、急に眼の色が變つて、いきなり其のお御籤の紙を竪に二つにビリリと裂い

てしまひました。

「何をなさいます、お嬢様」

お君が、周章てそれを押へようとしたのは遅く、二つに引き裂いたお御籤の紙を、お銀様はクルクルと丸めて、洗水盤の中へ投げ込んでしまひました。

「まあ、勿體ない事を」

と云つて、お君は怨めしさうに今投げ込まれたお御籤の紙を見つめてゐますと

「お君や、歸りませう、もう如何なつてもわたしは知らない」

お銀様はお君の手を取つて引き立てるやうにし、自分が先へ立つてお宮の前の鋪石を歩きました。お銀様の擧動には、いつでも此んな氣むづかしい事があります。夕立の空のやうに急に御機嫌が變つて人に物をやつてしまつたり、また自分の物を惜し氣もなく損してしまつたりします。お君はよく其の呼吸を心得てゐるけれども、この時はあまりお嬢様の我儘が過ぎると思ひました。我儘と云ふだけでは済まない、これは罰の當つたやうな仕業と思はないわけには行きませんでした。太神宮のお膝元で育つたお君には、神物を粗末にする事は罰當りといふ觀念が強いのであります。

「お嬢様、ナゼあんな事をなさいます、折角のお御籤を……罰が當ります」

「何だか、わたしは知らない」

お銀様はお君を引立てて、お宮の外へ出てしまひました。

「大吉は凶に歸る」

この時茶所で、米友が晝寢をしてゐたのは如何も仕方がありません。お銀様は先に立つて

「お城を見て行かう、お城の方へ廻つて見物して歸ることにしようわいな、早く」

「お嬢様、今日はこれだけでお歸りなさいませ」

「いいえ、お城を見て行きませう」

「お城の方へお出で遊ばすと暇がかかつてお家で御心配になりますから」

「そんな事は構はない、お城の方へ廻つて見たい、お前忌なら一人でお歸り」

「それではお伴を致しませう」

お君は已むことを得ずして、賑かな方へとお銀様に引かれて行くのでありました。その間にお君は紫縮緬の女頭巾を被り直しました。お銀様は、いつもよりは早い足どりでお城の大手の方へ大手の方へと目ざして歩いて行きましたが、どうもお君は、それが少しづつ物狂はしいやうに思はれて、不安の念に驅られないわけには行きません。

甲府の城は平城ではあるけれど、濠も深く、櫓も高く、さうして松の間から櫓と塀の白壁が見え、その後には遙に高山大嶽が聳えてゐる。濠を廻つて二人の若い女は大手の門の前へ立ちました。ここへ來るとお天守臺も御櫓も前には見えなかつたのが、よく見えます。

お城の大手の濠の前に立つてお銀様は

「君ちゃん、わたしは、どうも幸内が此のお城の中にゐるやうにばかり思はれてならない」
と云ひました。
「左様でございますか」
と云つて、お君も同じく城の方を見てゐました。
「幸内は、お父様の大切なあの刀を、わたしから借りて、この御城内の誰方様かへ見せに來たものに違ひない、この御城内のお方でなければ、有野村の近處で、あの刀を見たいといふやうな人がある筈はないのだから」
「それもさうでございます、御城内の誰方様へお出でなさいましたか、それが解りさへ致しますれば……」
とお君の返事から、お銀様は暫く考へて
「あのお君や」
と少し改まつたやうに云ひました。
「はい」
「お前は、この御城内に知人がお有りかえ」
「いいえ」
お君は、どうして私風情が、御城内のお方になんぞと、首を横に振つて眼を睜りました。

「お有りだらう」
と云つてお銀は意味ありげにお君の面を見ました。
「いいえ、わたくしなんぞが」
とお君は言葉に力を入れて言譯をしましたけれど、お銀様はそれを肯はないで
「お前は此の御城内にお親近の方がある筈なのよ、お前は知らないと云ふけれども、わたしは、ちやんと知つてゐる」
「お嬢様、どうして其んな事がございませう、わたしは他國者でございますから」
「けれどもお前、よく考へて御覽」
「どんなに考へましても」
「さう、お前、知つてるぢやないかい」
「いいえ」
「まだ解らないの」
「どうしても解りません」
「そんなら、わたしが云つて聞かせる、それ日外、お馬を調べにわたしの屋敷へお見えになつた、あの……」
「あ、御支配の駒井能登守様でございますか」

「さうさう、あのお若い綺麗な御支配の殿様の事よ」
「左様でございましたか、それならばわたしはよく存じて居りまする」
「それ御覧、知つてる癖に」
「それでもお嬢様、あの殿様を、わたし風情が知つてゐると申上げては恐れ多うございますね」
「いいえ、あの殿様はお前を知つてゐる、お前はあの殿様に御贔屓になつてゐる癖に」
「御贔屓なんぞとお嬢様」
「いいえ、さうでは有りません、あの殿様からお前に、あんな結構な下され物があつたのは、あれは殿様がお前を好いてゐるからなのよ、わたしは左様思つてゐる」
「お嬢様、飛んでもない事でございます、あれはムクの働きなのでございますよ、ムクが殿様の馬の危ない處を助けたから、ムクへのお禮心で、それで、わたしの方へ、あんな結構な下され物があつたのでございますよ」
「そればかりでは有りません、殿様がお歸りの時に、わたしは凝と見てゐました、殿様は幾度も幾度もお前の姿を振り返つてお出でになりました、お前はそれを知らなかつたであらうけれど、わたしはちやんと見てゐました、お前はあの殿様に思はれてゐるのに違ひない、いいえ、わたしの見た眼に違ひはありません」
お君は、お銀様から此の言葉を聞いた刹那にポーツと面が赤くなりました。何といふ事はないが、

胸に春風が吹いて心の波が漂ふやうな嬉しさで一ぱいになりました。けれど別に、お銀様の言葉には針がある、お君はそれを冷たく思ひました。
「お嬢様、そんな事を仰有つて、わたしをお嬲りなさいます」
「いいえ」
お銀様は冷たい權のある言葉で首を横に振つたまま、お君の方を見返りもしませんでした。
「お嬢様、もうお歸りになつては如何でございます」
「いいえ」
お銀様は、お城の方ばかりを見てゐました。お君も詮方無しにお城の方を見てゐると
「お君や、お前、あの殿様の處へお訪ねして見る氣はないかえ」
「如何致しまして、わたしなどが……」
「さうでは有りませぬ、お前があの駒井様をお訪ねすれば、駒井様は、喜んで會つて下さるに違ひない」
「如何して其の様な事が」
「外の人では、滅多にお會ひになるまいけれど、お前が訪ねて行けば、あの殿様は、きつと喜んでお會ひなさる」
「お嬢様、そのやうなお話は、もう御免を蒙りたうございます、御行列でもお通りになると可けま

せぬから、彼方の方へ參りませう」
「まあ、お待ち、お君、お前はそんなに歸る事ばかり急かないで、わたしの言ふ事をよく聞いてお
いで」
「はい」
「わたしは、お前に頼みたいことがある」
お銀樣の言葉は、いよいよ權高くなつてしまひました。
「お孃樣、今更、そんなに改まつて」
「お前に頼みたいといふ事は今云つた通り、お前は此れから、あの御支配の駒井能登守樣のお邸ま
で行つて來てお呉れ、わたしは此處で待つてゐるから」
「お孃樣、そんなお使が、わたくしなんぞに勤まるものでございませうか」
「いいえ勤まります、勤まると思ふから、わたしはお前に頼みます」
「まあ、如何したら宜しうございませう」
「これから行つて、橋を渡つて大手の御門へ入り、御門番には、御支配樣の處へ通る、有野村の伊
太夫から來たと云へば、きつと通して案内して呉れますから、さうして御覽」
「それでもお孃樣、殿樣がお會ひ下さるか下さらないか」
「まだ、お前、そんな事を云つてゐるの、きつと會ひます、きつと殿樣は、お前の訪ねたことを喜

んで、直にお前をお呼びになるに定まつてゐる」
「お孃樣、それはただお孃樣の御推量だけでございませう」
「さうでは有りませぬと云ふに、それはお前よりも、わたしの方がよく知つてゐる、さうしてお前、
殿樣の御前へ出たら、この間のお禮を申上げた上で、幸内の事を、よくお頼み申してお呉れ、大切の
刀を持つて行方が知れなくなつて困つてゐる、若しや此のお城の中の誰方かのお邸でお引止めになつ
てゐなされはしないか、それとなく、殿樣に申上げて見てお呉れ、さうすれば何かお心當りがお有り
なされるかも知れない、あの殿樣はきつと御親切なお骨折をして下さるに違ひない」
「そんならお孃樣、わたしが行つて、兎も角もお願ひ致して見ませうか」
「さうしてお呉れ」
「わたしなんぞが、お訪ねをしたからとて」
お君はお銀樣の言葉といふよりは其の壓力の烈しい命令に押しやられるやうになつて、大手の橋を
渡つて御門番の方へと歩みました。お君はお銀樣からせがまれて御門番の處へ行き
「御支配樣にお目にかかりたいのでございますが」
「御支配樣は太田筑前守樣か駒井能登守樣か」
「駒井能登守樣に」
「何の用で」

門番の足輕は六尺棒を突き立て、お君の姿をジロジロと見渡して居りました。
「あの有野村の藤原の家から參りました、主人より殿様へのお使ひでございます」
「左様か」
足輕は會得したやうな會得しないやうな面をして
「有野村の藤原家とあらば、仔細もあるまいけれど、御門鑑を御持參か」
「いいえ」
「御門鑑が無ければ滅多に通すことはならない……」
と門番は權柄を作りましたけれど、そのあとへ持つて行つて
「のだが……」
といふ言葉を附け加へて
「駒井能登守様は格別の思召で、訪ねて來た人は誰でもお通し申すやうに御沙汰があるから通すまいものでもない」
と云ひました。
「有難うございます」
とお君はお辭儀をしました。
「併し、只今御操練の最中でいらつしやるかも知れぬ、一應御容子を伺つて來るからお待ち召されよ、して有野村の藤原の家から來たお前さんは何と仰有るお名前ぢや」

「君と申しまする」
「宜しい、有野村の藤原の家から來たお君殿、只今取次いで上げる、暫らく其處で待たつしやい」
門番の足輕は權柄を作つたり、また粗略にも扱はないやうに見せたりして、一人が廓の中へ入つて行きました。その間、お君は門番の控所で待たせられてゐました。
お君が門番の控所に腰を掛けて待つてゐると、其處へ通りかかつたのは役割の市五郎でありました。前は一蓮寺の境内でお君等の一行が興行をしてゐた時に、木戸を突かれて大騒ぎを起したのが此の市五郎であります。市五郎は大そう景氣のよい身なりをして、懐手で廓の内から御門の外へ出ようとして、計らずも其處に控へてゐたお君の姿を見て足を留めて、お君の面をジロジロと見ました。お君はそれとは氣がつかないでゐる時、さきに取次に行つた足輕が戻つて來ました。
「案の如く駒井の殿様は御調練のお差圖であるが、お前の事を申し上げると、直にお許しになつた」
お君は足輕に導かれて行きます。
門番の控所を出た役割の市五郎は何か考へながら廓の外へ出た時に、また一人柳の木の蔭に立つてゐる妙齢の女を認めました。
市五郎は眼を丸くして後から、わざと其の女の傍の方へ寄つて行きました。
「はてな、不思議な事があればあるもの、今お城の中に入つた女がもう此處へ來てゐる」

市五郎は自分の眼を拭ひながら近寄りました。其處へ立つてゐた女は、今控所で見たお君の姿と身なりも形も寸分違はないで、ただ頭巾を被つてゐるのと、ゐないのとだけの相違ですから、餘りの不思議と其の女の側近くやつて來た爲に、柳の蔭でお城の方ばかりを向いてゐた女が急に振り返りました。

振向かれて市五郎はタヂタヂとしました。後姿も衣紋も寸分違はないけれど、眉深い頭巾の間から現れた眼つきの鋭いこと。

お銀樣が振り返つた時に、一時悸(きつ)として市五郎は、すぐに足を立て直して何氣なき體(てい)で向ふの方へ反(そ)らせます。

市五郎が同心長屋の角を町の方へ入つた時分に、何も知らないお銀樣は、まだお城の方を見て、お君の歸るのを待つてゐる。

大菩薩峠
第三冊

昭和十四年四月五日印刷
昭和十四年四月十日（戰時體制版）初刷二萬五千部發行

定價七十八錢

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の
外地定價八十五錢

著作者　中里介山

東京市麹町區三番町一
刊行者　長谷川巳之吉

東京市麹町區三番町一
刊行所　第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五
三三四四

東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社
印刷者　岩島潔

中里介山居士著

大菩薩峠

大乘と大衆とはその字相似たれども其の義は遠し。大乘とは六道四生の一切を乘せて此岸より彼岸に渡す大誓願を意味し、所謂大衆とは多數を導いて、いよ〳〵我慾凡俗の巷に墮せしめんとする。わが「大菩薩峠」は既に八千頁、五百萬言、人文あつて以來最大カンパスを用ひ、なほ有限無限を超越してゐる。之を讀むことは人類の義務であつて、之を讀まざるものは果報を捨つるに同じ。これ唯一無二の大乘文學にして婆婆即寂光土の福音也。

「大菩薩峠」目次

第一冊（甲源一刀流の巻・鈴鹿山の巻・壬生と島原の巻・三輪神杉の巻・龍神の巻・間の山の巻）
第二冊（東海道の巻・白根山の巻・女子と小人の巻・市中騒動の巻・駒井能登守の巻・伯耆安綱の巻）
第三冊（如法闇夜の巻・お銀様の巻・慢心和尚の巻・道庵と鯰八の巻）
第四冊（黒業白業の巻・安房の國の巻・小名路の巻・禹門三級の巻）
第五冊（無明の巻・白骨の巻・他生の巻（上））
第六冊（他生の巻（下）・流轉の巻・みちりやの巻）
第七冊（めいろの巻・鈴慕の巻・Ocean の巻）
第八冊（年魚市の巻）
第九冊（畜生谷の巻・勿來の巻）
第十冊（辨信の巻・大菩薩峠梗概（第一冊より第九冊まで））
第十一冊（不破の關の巻）
第十二冊（白雲の巻・籟吹の巻）
第十三冊（新月の巻）
第十四冊（恐山の巻）
第十五冊（農奴の巻）

以上各冊定價　金壹圓五拾錢宛
送料各冊拾貳錢

東京府西多摩郡
西多摩村四七
振替東京七五三三一番
隣人社

東京市牛込區矢來町五五　隣人之友社

戰時體制版の宣言

第一書房　長谷川巳之吉

此度計らずも杉浦重剛先生の『選集倫理御進講草案』を戰時體制版として刊行するの光榮を擔ふに當り、いささか戰時體制版發行の趣旨・抱負を宣言いたします。

凡そ出版の事業たる一國文化のバロメタアを成すは言ふまでもありませんが、特に現下の如き戰時下の非常時局に當つては、その責務益々重大なるを自覺し、茲に物資經濟の根幹を成す用紙統制に則ると共に、大局からの國策に順應する新日本文化の創造に進んで協力寄與すべき決意愈々固きを信じてやまない次第です。私は第一書房設立以來十五年、一意或る理想をもつて出版を續けて來たのでありますが、特に今日に於いて一層、良書出版の意義とその必要の大なるを思ひ、出版報國を第一義とする戰時體制版の刊行に邁進するに至つたのであります。

現代日本の出版界はその量に於いて、又種類に於いて世界の出版國の一つであると言はれて居りますが、その質に於いては果して何うでありませうか、名を大衆にかりる俗惡趣味横溢の娯樂雜誌や婦人讀みもの類の跳梁跋扈は、どう贔屓目に見ても一國文化の伸長にプラスするものとは考へられないのであります。惟ふに大衆化とは徒らに大衆に阿ねる事ではなくして、實に名著をもつて大衆を引き上げる事でなくてはならないと信じます。それ故に、私は此の戰時體制版を引提げて敢然と之れに對處しようと決心したのであります。從つて本體制版はその點・特に留意して、今日及び今日以後の日本人が、日本人として起つ上に是非とも必要な萬人必讀の書を、精神の糧として供給することをもつて使命とするものであります。

斯くして自然・本戰時體制版は、思想・藝術・宗教等の文化の各方面に渉つて、古今東西を通じて現代日本に最も緊要にして重大意義ある名著のみの普及を計るものであります。

今や史上未曾有の重大時機に際會してゐる私達は、國をあげて長期建設に邁進して居ります。而も戰後と雖もなほ國力總動員を要し、所謂『常在戰場』の氣力が飽くまで必要であることは言ふまでもなく、私が聲を大にして本シリイズを戰時體制版と呼號するのも此の意味に外ならないのであります。我々は更ら に前線銃後を打つて一體に結び、これをもつて事變中の用意修養に資し、戰後の準備を忘らず、日本人としての確乎たる脊骨と肚とを養つて新日本文化の建設に資し、進んでは來るべき東洋文化ルネッサンスの分擔者たるの實をあげたいと念じてやまない者であります。茲に微意を披瀝して天下幾百萬讀書子の鞭撻を翼ひ、熱意ある支持を衷心より希望してやみません。（昭和十三年九月）

戰時體制版

杉浦重剛謹撰 選集 **倫理御進講草案** 四六判四四〇頁 定價七十八錢

中里介山著 **大菩薩峠** 第一册 第二册 四六判各五〇〇頁 定價各七十八錢

中里介山著 **大菩薩峠** 第三册 四六判四三八頁 定價七十八錢

土田杏村著 **人生論・宗教論・人間論** 四六判三九四頁 定價七十八錢

小泉八雲 戸川秋骨 著譯 **神國日本** 四六判四〇〇頁 定價七十八錢

高神覺昇著 佛教聖典 **般若心經講義** 四六判三一一頁 定價七十八錢

山田靈林著 **禪學讀本** 四六判三二五頁 定價七十八錢

バアル・パック 新居格譯 **大地** 第一部 第二部 第三部 四六判各四〇〇頁 定價各七十八錢

戰時體制版

レイモント 新居格譯 **農民** 第一部 四六判四〇五頁 定價七十八錢

バアル・パック 深澤正策譯 **母の肖像** 四六判三三八頁 定價七十八錢

バアル・パック 深澤正策譯 **母** 長篇 四六判三三七頁 定價七十八錢

マアガレット・ミッチエル 深澤正策譯 **風と共に去る** 第一卷 第二卷 四六判各五〇〇頁 定價各七十八錢

アンドレ・ジイド 堀口大學譯 **ソヴェト紀行修正** 四六判二八〇頁 定價五十八錢

鍵田研一著 **石川啄木** 長篇 四六判四〇〇頁 定價七十八錢

林房雄著 **青年** 長篇 四六判四二七頁 定價七十八錢

林房雄著 **壯年** 長篇 第一部 四六判四三四頁 定價七十八錢

戰時體制版 選集 倫理御進講草案

杉浦重剛謹撰

現下ノ非常重大時期ニ於テ杉浦大人誠忠ノ結晶タル『倫理御進講草案』ノ發行セラレタルハ國民精神作興ノ上ニ裨益スル所偉大ナルヲ信ズ今ヤ思想的銃後ノ守リヲ固ムルコトノ一層緊要ナル秋ニ當リ本書ノ廣ク天下ニ普及センコトハ予ノ衷心ヨリ希望シテ已マザル所ナリ

公爵 近衛文麿

烈々たる日本精神の眞髓を傳ふる曠古の書にして、而も倫理の大本より季節、風物など自然觀照の妙諦、學藝、農産、工業、更に古今の偉傑、内外の典籍に及ぶ、知識の深き勸めと、德の高き敎への渾然たる結晶、正に萬人必讀の國民讀本!!

＊戰線と銃後を結ぶ戰時下出版の第一義を高揚せんとする我が社「戰時體制版」の根本精神に贊助せられ、玆に杉浦重剛先生謹撰にかかる『選集 倫理御進講草案』刊行の運びとなり、本戰時體制版が名實共に國民必讀のシリーズとして千鈞の重味を加へ得たことは、衷心から欣快に堪へないところです。

＊『選集 倫理御進講草案』は長れ多くも 今上陛下東宮殿下に在しませし時、天合道士杉浦重剛先生が前後七ヶ年に亘り、倫理を御進講申し上げた草案であり、烈々たる日本精神の眞髓を傳ふる千載の貴重書、その内容は倫理の根幹より發して、自然觀照の妙諦、學藝、農産、工業等文化の理解、古今の偉傑、内外の典籍の精神を說く、學德共に一世に冠たる先生の全人格の結晶といふべきもの。

＊いまや戰時下日本の現狀に即して國民全體を打つて一丸とする强き精神力のいやが上にも高揚せざるべからざるの時、更に大陸發展の第一線に立つ、世界的日本人として高き敎養の一層力ある向上の求められつつある時、我が「戰時體制版」が欣然玆に杉浦先生遺骨の遺業を以て天下待望の聲に答へんとする!!正に曠古の盛觀ともいふべく、我が社は全國民必讀の名著として、全機能を集中して本書の普及運動に動員、いまや猛然たる反響、怒濤の如き註文に答へんがために全力を擧げて感激の努力を盡してゐる。

戰時體制版 神國日本

小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）著
戸川秋骨 譯

＊あの詩人的直觀と、熱情と、美に對する犀利にして纍惑的な眼睛と、さうして偉大な蘊蓄と深邃幽玄な哲學的瞑想とをもつて、日本の眞と善と美とを流麗滴るばかりの金玉の文字に生かし綴つたものは、ひとり小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）を措いて他にはない。誠に先生の文章が一度現はれるや、纍の絶海の一蠻島も、いまは忽ち『神國日本』として歐米人の前に燦然たる光を放つに至つたのである。日本が今日世界的地位をかち得た所以のものは、この世界人である一天才日本人の、一管の筆に負ふところの多いことを思はなければならない。

＊本書の原名は「日本を解釋しようとの試み」といふほどの謙遜な意味であるが、日本名『神國日本』といふ漢字が附記されてゐる。言ひ得べくんば、本書は實に日本に關する先生の卒業論文とも目睹すべきものであらう。その家族制度、祖先敎など日本固有の精神の論評に筆を起して、佛敎儒敎の傳來から基督敎渡來に進め、その歷史的變遷と文化の推移をば仔細に考察して、更に日本の將來に論及する。

＊その暢達なる筆端と、その奔放自在融通無礙なる思索の驅使とは、先生の頭腦の如何に多角的なるかを示すものであつて、まことに日本の文化を根本的に研究せるものとして、他にその匹儔を見ない好個の文獻である。

＊さればこそ、この書が出版されるや、アメリカ海軍の當局は、世界屈指の日本研究の必讀書として、直ちに海軍將校以上には必ず讀ましめたと云はれてゐる。

本書を一讀する時、それもまた宜なる哉と感ぜざるを得ない。

＊我々はこの『神國日本』のなかに日本の眞實相とその特異な位置を發見し、その日本獨特の精神が、如何に他の諸々の東洋思想に伍して優越せる地歩を占むるかを理解する。この書が日本精神の研究上、稀なる標準的權威たることは、今更ら贅說する要はないであらう。

アメリカ海軍の當局は本書を世界屈指の日本研究必讀書として、海軍將校以上には必ず讀ましめたと云はれてゐる!! 今や日本そのものの價値と權威を此書に依て再吟味し、日本民族の處すべき道を決意することは刻下の國民的義務である!!

戰時體制版 佛教聖典

般若心經講義

高神覺昇著

＊第一書房が曾つての宗教革新運動の第一線に立つたことは周知の事實であるが、その實彈となつて全日本の知識層に猛烈な勢ひで喰ひこんで行つたのが本書です。今や時代は一變して、日本の黎明期となつた。日本の强さが科學的精髓の發揮と共に、人間的覺悟と力の强さにあることはいふまでもないが、さうした覺悟を不斷に培ふ糧として、最も直截に、心の底から理解できるやうに說かれたものが本書です。

＊一時代を動かした名著といふものは決して偶然からは生れない。かういふ內容を持つた書物が、どうしても出來なければならないといふ全國的な要望がますます高まり來つた際、さういふ輿望を全身的に痛感し、全力を傾げてそれにぶつかつて行つた時代の先驅者のみが、新しき行路を指示し、萬人の渴望を滿たすのです。

＊高神覺昇氏の『般若心經講義』が正にそれでした。ラヂオによつて佛敎の眞髓を傳へるといふ計劃が立てられるや、氏は直ちに第一線に選ばれ、昧爽の二十分間、マイクを通じて全國の勤勉なる、敬虔なる生活人の明朗な同伴者となり、道案內者となつて、心ゆくまで佛敎の眞諦を大衆化せられた。

＊ラヂオの講演から本書となり、その全國的反響は一躍本書を劃期的なベストセラアズに推しあげたのみならず、從來宗敎問題と絕緣狀態にあつた新聞雜誌ジャーナリズムが、一齊に宗敎欄、宗敎問題にその紙面を開放するに至つた。この方面に於いて本書が日本文化に貢獻した功績も大きい。

＊特に最近、中央盲人福祉協會で、失明軍人への贈物として讀本器（トオキング・ブック）を作製した際にも、最初に本書が選定された。ある將軍の實驗談によると、「戰爭に一番强い兵隊は佛敎の盛んな地方の兵隊だ」といはれたといふ。佛敎の盛んな土地の人達は死に對して常に安心を得てゐるから、いざといふ時に決死の覺悟が直ぐ早く出來るのだ。この名著が戰時に特に意義ある所以も正にそこにある。

脈々と波うつ人間的な息吹きと感激!! 高神覺昇師の全人格によつて躍如、打つて一丸となされた聖典講義こそ、日本佛敎の最高の手引草であり、我等の日常生活に不可缺な日本人的叡知の源泉にして且つ人生修養の不朽の結晶に外ならない!!

戰時體制版

禪學讀本

山田靈林著

＊禪は難解であり、坐禪を組んで悟りを開くことは高僧達士にのみ許された人生道であるといふことをきくにつけても、禪とは何か、禪が何故古來から日本の精神修養の大きな根幹となつてきたか、かういふことを誰れでも知りたいと思ふ。しかも、禪は、古來から職場を己が死場所とするすぐれた武人の、私的生活に絕えざる緊張と同時に人間的な高貴な潤ひを與へてきてゐる。

＊本書は、一般人のために書かれた唯一の禪學入門であり、日常生活の、誰れの周圍にも必らず見付けることができる疑惑や反省や惱みや喜びやを通じて、禪の本質を說かれたもので、數年前初版刊行以來、非常な高評を以て迎へられてゐる。

＊例へば、目次を一見しても、「室內の風光」「憎愛を越えて」「以心傳心」「無常」「寂光滋々」「安居道場」「業力」など、孰れも親しみやすい文章の中に處世上の燈臺となり、羅針盤となる物の觀方や考へ方が示されてゐて、これてこそはじめて禪學が第一歩から體得されるのだと感嘆せざるを得ない。

＊（私は或る日、フト『禪の生活』といふ雜誌を開いてみた。ところがそれへ連載されてゐる山田靈林師の『禪學讀本』を讀んで非常に感歎し、之れを探し得た自分を愉快に思つた。「ム、私の求めてゐた禪學の新人といふのは正に此の筆者に違ひない」と快哉を叫んだ程であつた、といふのは、從來、我々の前にある多くの禪の書物は、專門的な、參禪しない人には眞く分らないむつかしいものが多い。これでは禪の妙味は、到底、新しい知識大衆の我我のものとはならない、と考へたので、玆に山田師を慫慂して本書を刊行する所以である）と第一書房主が、本書を刊行するに至つた奇緣を述べて居られるが、かうした驚異と感嘆こそは、本書を讀んだあらゆる人々を衷心から摶たずには措かないであらう。

＊卷末の「坐禪の實修法」は、常住坐臥の間に、禪を行ぜんとする人々のため、得がたき手引となるであらう。

日本人には如何なる外敵、如何なる事變に逢つても、微動だにせぬ素晴らしい膽力がある。これこそ古來から武人が、日本魂の精髓として一日も修養を怠らなかつた禪の極致であり同時に日常生活の緊張に爽氣と雅致を生かす禪の第一歩だ。

戰時體制版

大地

第一部
第二部
第三部

パアル・バック
新居格譯

＊支那を知るためには、如何なる本を讀んだらいいか、それに答へるものはパアル・バツク夫人の『大地』です。日支事變の勃發と共に、俄然、世界は異常な關心を以てバツク夫人の『大地』熱流行を現出し、我國また本社の先驅的飜譯によつて既に代表作が悉く邦譯せられたゐた矢先きとて、玆に猛烈な反響を惹起した。

＊『大地』は支那を知る得がたき名著であるのみならず、これを小説といふ點、人間性の究極點を突いた文學としてみても、亦世界を驚異せしめる傑作です。バツク夫人が幼少の頃から支那に育ち、その夫君として支那農政の大家ロッシング・バックと結婚しなかつたら恐らく本書は生れなかつたであらう。

諸家の紹介と絶讃

＊『大地』發賣と同時に谷崎潤一郎氏は「日本よ何故支那を書かぬか」と題し支那農民の氣質、思想、經濟力、生活樣式、家庭の狀態を知る名著として廣く世に紹介せられた。

＊續いて正宗白鳥氏は『母』を「文句なしに感心して讀み終つた」と批評され、馬場恒吾氏又『文藝春秋』に長文の『大地』讀後感を執筆され「讀了後これほど偉大な書物を讀んだことはないと感心した。私が青年の時から讀んで、私の一生を感化したと思はれる世界的名著の何れに比較しても劣つてゐるとは思はれなかつた」と感激され、帝大教授蠟山政道氏は馬場恒吾氏の一文に答へつつ、『婦人公論』誌上に於いて「大地の數節」と題し、『大地』の女主人公は、自然的な數千年の歴史を持つ支那社會のヒロインであり「大地の地主として又やがてそれを更に賣却して分裂してゆく息子達（『大地』第二部）の生活こそ極めて重大な社會問題である」と鋭い批判を示され、德富蘇峰氏またバツク夫人が支那の現地に即して之を見、之を聞き、之を感じた」點を推賞され、諸名家口を揃へて『大地』が刻下國民總動員下の支那認識に如何に重要な名著であるかを推賞されてゐる。

＊パアル・バツク夫人の支那小説は、支那に關心を持つ外交、經濟、政治畑の名士間にも非常なセンセイションを惹起し、元遞相南弘氏が、友人知己に『大地』を推賞され、曾て『東洋經濟』主幹として、實際經濟の權威たる三浦鐵太郎氏は、元日銀總裁深井英五氏にこんないい本はないと推賞された。また支那經濟の權威高木陸郎氏は、「支那の社會事情を最もよく書いた傑作」と激賞された外、笠間昊雄、石川三四郎、白柳秀湖、石本靜枝、本多顯彰、北村小松、林髞その他の名士が擧つてバツク夫人の眞價を賞讃された。

『大地』が全女性に與へた家庭的影響は、忍從の精神こそ凡てを超克する女性永遠の勝利だといふ尊い信條に外ならぬ。『大地』が男性の魂を搏つた反省は、良人のため、家のために一生を捧げる女性が如何に貴重なるかの感激に外ならぬ。『大地』が農村に及ぼした社會的意義は、須らく土に歸つて大地を愛せといふ永久不變の眞理である。さらに『大地』は支那の風俗、生活、國民性を知る唯一書として全世界が競つて飜譯し、現在世界で最も多く問題となり最も多く讀まれてゐるベスト・セラアズの首位を占めるに至つてゐる。

『大地』第一部

パアル・バツク夫人の支那小説の一切の出發點が玆に發してゐる。內亂と飢饉とを繰返す支那四千年の苦惱を身を以て突き拔け、一介の農夫から巨萬の富を成す勤勉刻苦の主人公王龍に配するに、この夫のため運命の苛酷な試練を靜かに諦觀して死んでゆく妻の阿蘭。支那の恐ろしさが魂の底まで泌みわたる。こんなにしなくては生きて行けない、なんといふ支那の現實であらう。

『大地』第二部

『大地』第一部、主人公の王龍の一代が終るところ——丁度、映畫の「大地」が終つたところから「息子達」の時代がはじまる。巨萬の富を分配された息子達が、地主と軍人と商人となつて活躍する。玆でバツク夫人は、近代支那の軍閥の成長した過程と、その現在の勢力を徹底的に解剖し、追究する。支那軍閥が到る處で波瀾を惹起する、息もつがせぬ小説的な面白さ!!

『大地』第三部

『大地』はさらに三代目に進む。大地から生れ、大地を讃美して死んで行つた王龍の末裔が、大地を離れ、現代の錯雜した文明に蠶食されて、つひには分裂し、沒落してゆく過程が描かれてゐる。本篇の主人公はアメリカに留學した新時代の水先案內である。支那の知識階級が東西文化の乖離に如何に惱むか。彼等に果して黎明が來たか。モダン、チャイナの徹底的な解剖!!

＊某總裁の手紙＝映畫を見たら急に本が讀みたくなり、早速本を讀んだところ、正しく噂に違はぬ傑作で、一讀再讀興味つきず隣邦支那の認識にはこれあるのみと妻にも讀ませ、毎日夫婦で『大地』の話ばかりしてゐます。小説といふものが斯ういふものなら、小説に關する認識を改めなければなりません。一讀者として深甚の謝意を表します。

『大地』以來支那小説の流行時代を現出したが、何といつても世界が一齊にこれを飜譯し、支那小説の最高傑作と推してゐるのは『大地』あるのみ。現地でも盛んに讀まれて引張凧です。慰問袋には缺かされぬ一冊です。

389
327

戰時體制版

石川啄木

鐘田研一著

＊これは著者の多年の苦心になる堂々八百枚の大長篇小説である。從來の傳記小説の型を破り、全く斬新な形式によつて啄木の生涯とその歌とを巧みに織りまぜて、息もつがせぬ興味で讀者を最後まで引つぱつてゆく。これ以上に啄木を見ることは不可能である。作中に出る歌は、歌だけ離して讀んでは感ぜられぬ意味と强さを帶びてゐる。夭折せる天才啄木は、ここに初めてその全を姿で甦つた。

＊

小林橘川氏評

鐘田氏の小説『石川啄木』を讀んで

不世出の天才詩人、石川啄木の生涯を描いた堂々八百枚に亙る大事實小説!! 啄木を生んだ時代!! 啄木をめぐる人々!! これこそ、日本近代思想黎明期の赤裸々なる文壇裏面史である!! 情熱の歌人、啄木は今こそ高らかに生きて歌ふ!!

私は啄木といふ人間を見直したのである。彼の生涯の全生活を通ずる懊悩と苦悶と野心と努力と、これらの一切を交錯したる人間啄木を、はつきりと私に見せてくれたのである。

讀み始めてみると、私は深い感動をもつてこれを讀み續けた。そこには天才詩人啄木の面影といふよりも、煩惱にみちた人間啄木の平凡な姿が痛しく私に映ずる。「おや啄木はやつぱり僕と同じ人間だつた」といふ親しみ深い感じが、到るところに發見される。いつのまにか私は、私の凡人としての姿を、啄木に見出したことを微笑ましい氣持ちで眺めてゐるのである。

懇愛と耽溺と、虚無と、絶望と、野心と、光明とのとりどりの青春が、彼をめぐつて展開する。これは私たちに共通するある時代のきまりきつた生活の型である。それは時代が十年古くてもいけない、十年新しくてもいけない。さうした同時代の、同一空氣が、私たちの胸をしみじみと打つのである。

この小説『石川啄木』を讀んでゐると、いつのまにか、知らず知らず、私自身が彼の持つてゐた天才的な高い調子に引きあげられて、私自身が天才的な生活を現にやつてゐるやうな感激に浸るのである。さうした魅力が、この著書から感じ得られるのである。これは凡人の錯覺に過ぎないが、さうした興奮を豐かに私に與へてくれるこの著者の筆力は、また驚嘆すべきである。

終